

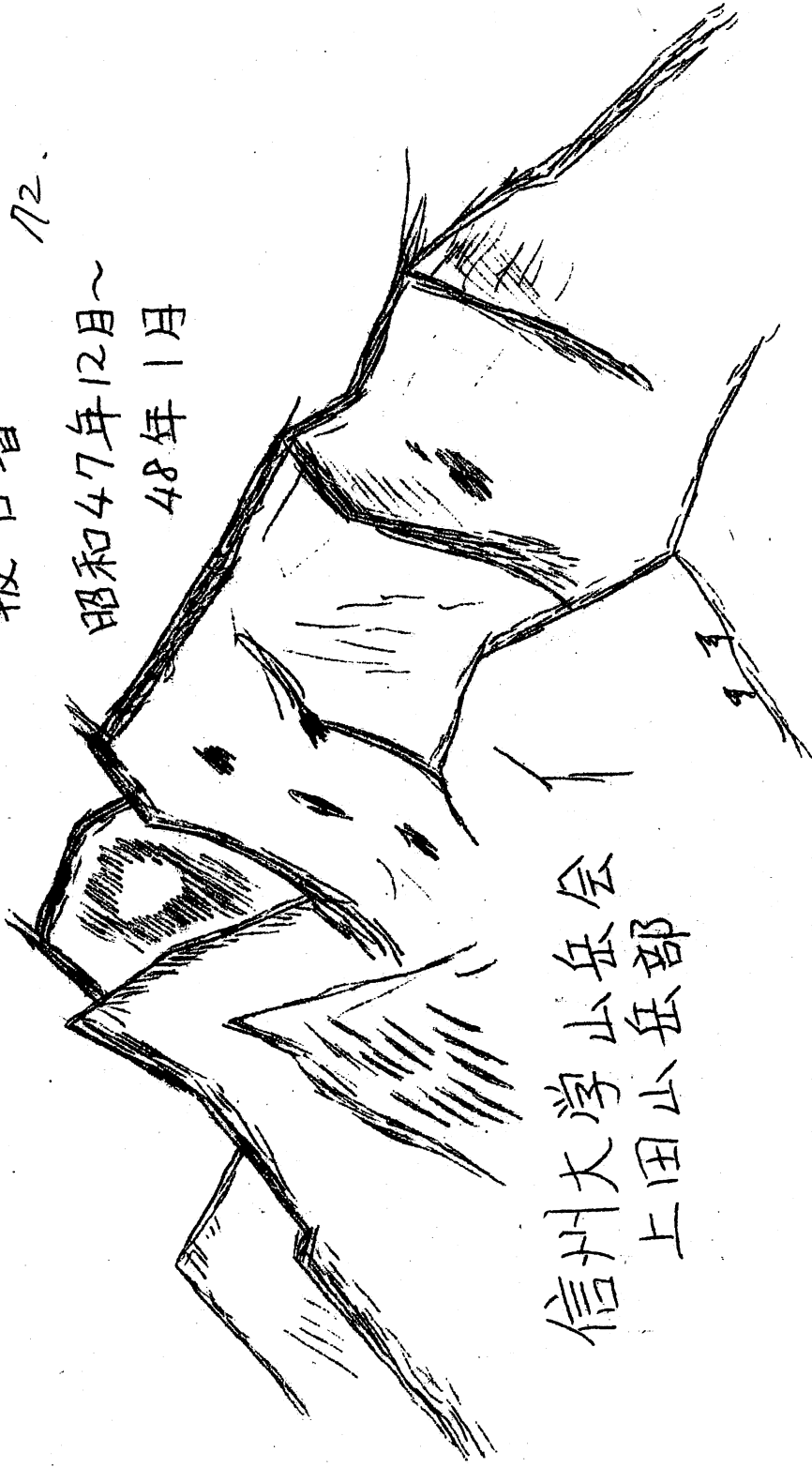
部空用

鹿島槍ヶ岳

巖冬期登山  
報告書

12.

昭和47年12月~  
48年1月



信州大学小岳会  
上田小岳部

## 巻頭のことば

冬山合宿を終えて成功したのだろうか。  
この合宿では、成功、そして失敗という言葉以上のものを残してくれた。吹雪の中を、冷い風の痛さを感じつつ北峰の頂上に6人もの部員が立てたこと。その頂上でこれがピークかと、ため息をもらした。そのため息には、上田在任の部員にとって、かなりずっしりとした重みを加えたものに違いない。じつは長からた、たゞそれだけである。この冬山においては、共同作業的な登山を目的とした。あしまで、7人の力を結集させ、各自の全体的な山に対する姿勢を貫き、個の力を一つの集合体とさせ冬山に取り組んだのであった。上田山岳部として、この冬山の位置づけは、この冬山を土台として、より困難へとより厳しくと進むためのものであろう。

前半戦は、かなり行動日を増やすことができ、そして、元旦に下山することができたことは、今年の冬の鹿島一番乗りを果たし、自分達の手でフックス工作ができたことは、この合宿の中で、輝やいっていることのひとつではないことだろうか。これからも自分達の力を知り、痛さを感じつつ山へ行こう。観光客のような登山はすべきでない。地味にこつこつと一歩一歩進むうまはないか。これからは、今以上、光が見えるような山行をやしてほしい。最後に、色々と冬山入山中心配をかけた先輩方、先生方、そして厚生補導の方にお詫び申し上げます。

若い頃、山へ登り続ける者の心の中にあるものは消え去らないであろう。山登りをやめても。

CL 杉本恭二 S.48.1.10. PM 9:00

○メンバー

CL 杉本 恭二 (工化4)(部歴3)  
進路 日本フェルトKK(特)

SL 横井 憲 (化工4)(部歴3)  
梱包 進路 三映電子(確)

食料 立岩 剛 (織農4)(部歴3)  
進路 公務員(確)

勝山 英久 (工化2)(部歴1)

装備 市川 豊 (機4)(部歴2)

広山 和臣 (織農2)(部歴1)

医療 石川 良昭 (化工1)(部歴1)

現役留守本部 古塚 直行 (機1)(部歴1)

会計 勝山 英久

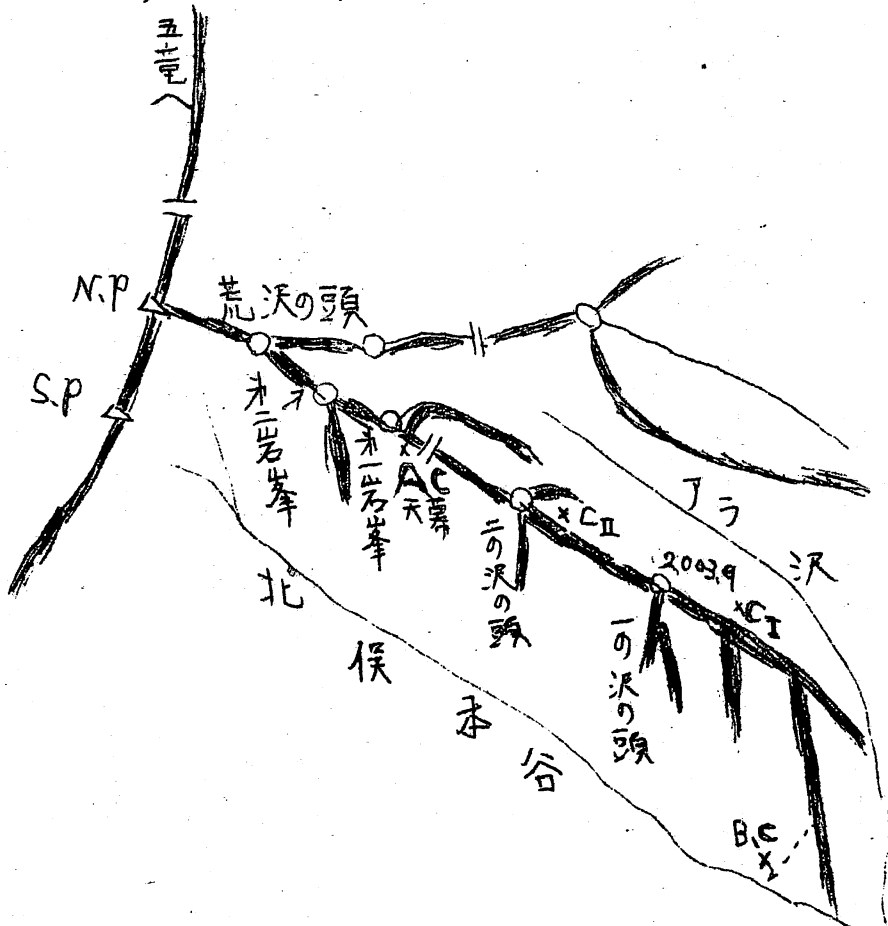
渉外・気象 広山 和臣

○目的 厳冬期 登山技術向上

○期間 昭和47年12月21日～48年1月1日

# 概念図

鹿島槍ヶ岳東尾根はアヲ沢を経て北版本谷と分け、冬期において魅力的な登攀を与えてくれる場所である。残雪期なら、日帰り、N.P.を踏み、そして松本の夜を



大谷原 介 後  
 楽しめる。一の沢の頭から二の沢の頭までは新雪降り、かなり判断力が要求されるし、大変面白い。是非トッポで誰もが歩きたくなるでしょう。オ1岩峯は、少し嫌な所であった。オ2岩峯は、かなりの登攀力にのみ許された場所である。

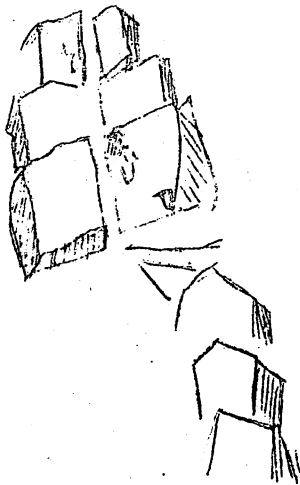
ルート ☒

その1.



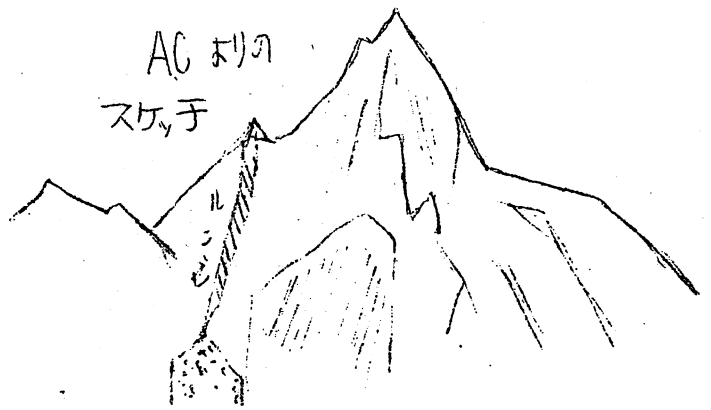
取り付き点より5mは、岩壁であった。アイゼンのツメをきかひ、登り出す。その後、雪がぜつきの右側の方(アラ沢側)は、岩に雪がつか、やりにもくかったが左側の方は、十分に雪のスタンスがとれる。その上40mのフィクスゲイルはスルナーが、ルングした岩から木が出てあり、へ変やりにくかった。40mのイソを伸ばし、大岩の雪田にて、シャフトを雪中に打ちこみ、グリップで実施した。

その2



取り付き点は、ビレーク出きるような雪。その後、雪がつかない、小岩をクフ越え、越えて、ビレ地点に到着、ほとんど足場がなくなり、左へ少しトラバースし、あとは腕力にものをいれ、登る。ト中疲れると、岩と岩の間で、岩をかかえるような姿勢で休む。その岩と岩ではまかれたところを、パッシュホールなどで登り切り、雪のついたゆるやかな斜面に出る。

AG 木の  
スケ子



行動日程

	取り付き	C I	C II	A C	頂上	備考
S47.12.21	17名					
12.22	4	3				C I 建設
12.23	①, ②, ③	4	3			C II 建設
12.24	⊗	4	3			
12.25	③		7			C II 建設
12.26	⊗, ②, ③		4	3		AC 建設
12.27	①		4	3		北の アウ 成り
12.28	①, ②, ⊗		4			アウ 成り
12.29	⊗		4	3		×ニハ 成り
12.30	⊗		4	3		
12.31	⊗		7			AC 撤収
S48.1.1	①		7			下山
	1100米	700米	300米	1000米		

行動記録 S47.12.21 → S48.1.1

○12月 21日 ○(4)

上田 7:10  
大町 10:30  
大谷系 11:00  
荷上げ 11:05  
開始

設営終了  
3:50  
(PM4:30-05C)

○鹿島まで電車とバスで入り、ピッケルだけを持って、カチカチの道を、荷物ほどの辺まで入っているが太変気にならなから、入力は尻もちをうきながら、鼻唄さるロザチみながら歩いた。大谷原で、先発隊兼荷物番のH氏が笑顔で迎えてくれた。ここから取付まで、荷物を2度に分けてはこがもの1度で運ぶがカチカチ者もいたということでは不幸な3名 (Eisen) 当ホントにごくろうさま。(市川)  
○先発隊として、軽トラックで大谷系まで入った。途中ジェーコをつけたりの苦勞の末、大谷系へ着いたがこの先のダム監視小屋まで入りたが、車が入った跡もなくここで受協した。大谷系から取付まで荷上げのためのラッセルをしてトレスをつけたが、テニ場を探してきた。結局、取付点の盆地状の所をテニ場と決め、残る自分の荷を運んでトレスを更にいかりたものにすると同時に寒い所かを仲間へ到着まで待っていた。この日不運にて、Eisen 当となる(広山)

○12月 22日 ○

Eisen 当 4:30  
先発 後発  
TC発 7:00 7:40  
尾根 7:50 8:10  
や2比子 9:00 9:10  
1780M 11:30  
(C)

や3比子 10:45  
C着 11:10  
出 11:50  
TC着 13:00

先発隊: A 杉本  
市川  
勝山  
後発隊: A 横井  
立岩  
広山  
石川

○(後発隊)

先発隊より遅れること30分、1人 25kg程の荷をかつぎCへ荷上げに行く。先発隊のラッセルを追い2ピッケルで3名に追いつく。赤旗が乱舞しているがそれほど難しい屋根ではない。天気もよく絶好日寄である。ラッセルは腰から胸まで急斜面を登りC着。3名と別れ、往路を1時間で下る。上ははちがひ、下は陽がかりて寒かった。(横井)

12月23日 ② → ③ → ④

先発隊

C<sub>1</sub> 8:15

一の沢の頭 9:00

1本 10:15

C<sub>1</sub> 設営 11:25

後発隊

TC 7:40

1本 8:30~40  
尾根

2本 9:45~10:15

C<sub>1</sub> 設営 取付

10:55~11:10

C<sub>1</sub> 着 11:40

C<sub>1</sub> より C<sub>2</sub> へ 荷上げ 横井 立岩

C<sub>1</sub> 12:45

C<sub>2</sub> 13:40~13:55

C<sub>1</sub> 14:20

先発隊

C<sub>1</sub> を3人で徹夜し一の沢の頭目指して登る。C<sub>2</sub> を2100m  
地桌に設営し石川君を残して、勝山君と共に1500m地桌  
まで戻る。紅茶をつくらせて横井パーティーが待っている。さ  
うと甘い考えが多かった。12:00頃 C<sub>1</sub> に着いたが横  
井パーティーは設営中だった。横井、立岩そして小生ら  
2名と C<sub>2</sub> へ。1斗缶をかつぎ出来るだけ C<sub>2</sub> へ荷を上げる  
(杉本)

後発隊

昨日と同じコースをもう一度登らねばならない。死にもの狂いで  
足を運ぶ。C<sub>1</sub> に着くとほっとした。テントを設営後、BC  
からおりてきた、Kと共に Y と T はテボをする。  
一の沢の上部はかなりきつい。(立岩)

12月24日 ⑤ 全沈 クリスマスイブ

後発隊 昨夜より降り続く雪は夜が明けても止まないで、  
停滞する。10:00 頃起きて朝食のしたくをするが、テントが  
だんだんと窮屈になってきて中に入るのがいやになってくる。  
降雪をするが矢の様に降る雪はすぐテントをつめてしまう。  
ラジオはクリスマスソングばかりやっている。

[追加]

12月27日 ⑥ B・C 今日一日中心配が絶えなかった。横井のことだから無理  
はないと思った。7:00 ACY 受信、リカンをつけて出発の準備だった。それから5:00  
9:00 と受信した。順調に受信し続けた。そして天候も良く予定通りに  
登攀続行しているか、南峰までと考えていたが風邪気味の横井氏の声が  
トランシーバーで気にかかり無理しなくていいと判断した。クパーティーも北峰だけ登頂  
AC 天幕へ引き返すコールを受けた。PM 1:00 受信したがそれから受信できな  
かった。その時京大パーティーに出会い、かなり下降し午ニナリ出番待ちしていると  
ころだった。石川と AC 天幕に出かける。黒く日やけた広小が留守番  
をしてお茶をのませてもらった。(杉本)。



12月25日 ⊗

先発隊

Get Up 5:45

BC 登 8:10

C<sub>1</sub> 着 10:21

全員

C<sub>1</sub> 登 11:35

一沢の頭 12:25

BC 着 1:35

先発隊

小雪山じりの中を3人、ロープセルしながら4人をお迎えにゆく。3人の中のト、フが消えた(セカンドの人の誤)。雪庇だったのでお止まらなければケがぐらひしたでしょうが、5m程おちて止まったので冷たいだけですみました。優しいリーダーがザイルを投げ下すいました。C<sub>1</sub>へ着いた時、4人はテントの中で暖をとっている様子でした。(市川)

後発隊

Essen Get Up 5:00

後発隊

我々は早いに起床したのに、先発隊が起床が遅れたため全体の行動がずれて来た。一沢の頭付近の雪の状況に関する先発隊の偵察結果を待ってBC集結するかなどを決めることにした。こちよりアラミーのかけ声を発するも応答なし。為近くになつてBCに向けて全員で出発したがBCのいいテニ場に先客がいて我々はいつてルートは横へ設営する。後にこのBCテニンは最悪の居住条件にちかるとは、誰か知る由がなかった。2日以来4日目にしてやっと全員集結、さあBCが出来た。いよいよこれから本番だ。

12月26日 ⊙

Essen 当

Get Up 4:30

食事 5:45

BC 登 8:10

AC 設営 9:20~

杉本市川

偵察及びフィクス

工作へ

1:15 フィクス終了

AC 登 12:00

立岩 石川 BC

杉本市川 AC 着

14:00

杉本、勝山 BC

14:40

全員がそろって雪の上を歩くのは久しぶりであった。今日1年生をトップに立たせ、少しいいれるとする。設営は市川と小生を除く5名にまかせる。小生と市川はフィクス工作に出かける。市川は山岳部がかなり手こずっていたが我々は市川をトップに登攀を開始する。適当な木にフィクスし、スクリューに輪をつくるのを忘れていたため、下りながらある一定の間隔で輪をつくりながら下りた。誰かさんは、キシキシと騒が、寒い所には小生を待せた。(杉本)

今日はAC建設の日、AC隊、BC隊と存てBCを出発。トリフキまでであるが先行パーティのトレスがあった。しかしこのトレスがかなり雪庇の方へおいてヒヤヒヤする。結局安全なところへつけ直すようになってしまう。急登して本もと上へ行くつもりかと思つたら、そこへ設営ということ。目の前に見える岩峰は登れそうでもあり、又むずかしいところもある。先行パーティが登っているのが見えるがなかなかかたがたないようす。設営を終り、俺と立岩氏だけ先に帰天する。杉本市川両氏は今ごろフィクス工作中であろう。そんなことを考えながらBCへと向つた。(石川)

12月27日 ⊙ ~ ⊙

Attack CL横井市川

AC 7:05  
第2岩峰下 7:30 ~ 45  
" 上の稜線 8:30  
" 9:05

荒沢の頭 手前  
Peak 11:00 ~ 30  
N.P 12:00 ~ 20  
順番待ち 12:40 ~ 13:25  
1本 14:00 ~ 20  
第2岩峰上  
14:00 ~ 16:25  
(順番待ち)

AC 17:50

Attack

広山に見送られてACを出発。第2岩峰下までゆがんで登る休  
んでアイゼンにはキカえている時天気は荒れ始め、ひ  
びく風雪となった。昨日のフィクスもあり、時間モカがるのでア  
ンサイルシなかった。コールも聞えず、不安であったが登り  
続けた。手に力を感じなくなった頃、ツェルトをかがる。食  
欲なく、夕バコのみ口に入る。雪庇は荒沢本谷側へ張り  
出している。荒沢の手前に2pickほどの岩場があった  
が1pickはコンテニアスで省略する。残り1pickはは  
スクストロープがたれ下っているが腕力がなく時間がかかる。  
ミニからは風も弱まり快晴である。写真を撮りながらゆ  
くりと北峰に立つ。中部山岳が一望である。記念写真を  
とると頭痛はするは体はせむいはず、南峰は無理であり  
引き返す。荒沢の頭であったが大が下降に時間がかか  
り順番待ちである。アアサイに3回で岩場を下り、又第2岩  
峰上で順番待ちである。2時間もまたされ、ACへ着く頃は暗くなっていた。  
(横井)

12月28日 ⊙ → ⊙

BCよりAttack Attack

A: L 杉本 勝山  
B: L 立岩 石川  
BC 発 6:25  
AC 着 7:05  
発 7:30  
第1岩峰上 8:35  
第2岩峰下 9:10  
登攀開始 9:40  
第2岩峰上 10:05  
荒沢の頭 10:30  
N.P 11:30  
第1岩峰上 2:00  
" 下 3:25  
AC 着 3:35  
BC 着 4:40  
AC: 杉本 山、勝山  
BC: 横井市川、立岩、石川  
といつ形にある。

朝起きると隣のK山岳会は出発していた。ヘッドランプをつけて我りも出発  
する。何か新人合宿を思い出す風景である。ACで装備を借りてい  
よいよAttackである。第2岩峰は何とかが登れたが、第2岩峰はひと  
い。ホバーハング帯があり、そこはスクスザイルを手にかりあげア  
イゼンをかりかりやりながら登らねばならない。第2岩峰の上からは、  
雪の屋根を登ってゆくと北峰にいた。視界はゼロで何も見えな  
かった。(立岩)

12月29日 ⊙ 風強し 沈, メンバーチェンジ

B.CよりAC ◦ B.C → A.C

立岩, 石川 A.CのKとB.CのTが入れ変わるため先にTが2:10  
B.C発2:10 にB.Cを出発する。風雪が強いおまけに昨夜よ  
A.C着3:30 での雪が凍りつきその上に今日の雪が積もっている  
A.CよりB.Cへ ので歩きにくい。3:30にA.Cに着く。Kはすぐに  
勝山, 石川 Tと一緒に上がってきたIと共にB.Cまで降りていく。  
A.C発3:40 4:30 B.C着 (立岩)

B.C着4:30 A.C

A.C杉本, 立岩  
広山  
B.C横井, 柳,  
勝山, 石川  
となる

東尾根の主(自称)としてA.C建設以来ずっとテンパ  
キパーとしてA.Cを支えて来たけれどやはり、アタック  
できそうもないと思うと淋しい気がする。7人の内  
他の者は全部アタックをして成功したのだから。しかし  
6日向A.Cにいるという事でアタックを支えることの  
重責と任務の重さ、特に疲れて帰ってくる  
アタック隊に暖かい心と温かい飲み物を提供す  
るこの意味と行動を身をもって実践し体験したこ  
は、今後に大きな自信を与えてくれるだろうと  
思う。(広山)

12月30日 ⊙ 沈

メンバーは  
29日変更後  
のま  
B.C ⇄ A.C  
広山  
松本に出る

◦ B.C

暇なのでテントの外に出てみたらピッケルをがえ  
二の沢の頭より下りてくる者あり。我々がアイドルH君。  
トランシーバーの応答がないのでCLの伝言を持って  
来たとか。H君の訪向を4名はシルク, お菓子,  
スパゲティ等大歓迎する。シゲモクさえも来た  
S氏にロングホープを患えてやっていると聞き  
H君の復しさに落涙さえおぼえ、それに比べ  
S氏のヒゲ面が大きな顔でホープをあげている  
かと思えば非常に腹立たしい気がしました。(柳)

12月31日 ㊟~㊿ A.C 徹収、B.C 集結

・B.C

A.C 徹収のため、市川、石川が B.C より上り  
てくる。トランシーバーで B.C と交信し、フィクス  
回収について S.L. と話し合った。が、  
社会人の 2 パーティにフィクス回収を中止し  
欲しいと依頼されたが、放置 (杉本)

1月1日 ㊿ 1973

BC 発 9:15

1 本 10:00~20

取付点 10:55~11:20

鹿島部落 12:30

上田にて解散

## 山行中の事故報告 (CL杉本恭二)

山岳部の報告書と言え、キレイ言ばかりを並べ、何処へ登り  
ぞしてコースタイムが早かったとが奥に何も無い形式的なものが  
多い。もっと苦労したことをどしどし書くべきである。

### 1. <12月25日>

CIIよりC1へサポートに出発する。メンバー杉本、市川、藤山、  
12月23日夜から24日まで降り続いた雪のため、小生らのトレ  
ースは消え、新雪が1m40cm近くも積った。25日はCII集結のため  
に我ら3名はサポートへ出た。尾根はやせており、アラ沢側は  
雪庇として北俣本谷側は、ナダレをうな斜面であった。トップ  
が1分に順番が回り、トップ交代後、5分程度で、トップの姿  
がスーッと消える。残りの2人は、アラ沢の方へ顔を向けると  
、5m下の雪面に、シャフトを雪中に差してストップしている彼  
を発見。彼は自力で登ろうとしたが、それを即止し、彼の雪庇  
を踏みはずした場所から5m近く離れた一の沢の頭よりから、  
ザイルをたらし、尾根へ登らす。

(反省点)

ザイルで結ばれた2人が同時に動く場合、その場合ではサカ  
ンはトップの滑落時のショーゲキ力に十分耐えるだけの確保姿  
勢を早急にとることは出来ない。トップとセカンドが隔時姿勢  
の状態でセカンドがトップを確保することが考えられた。しかし  
時間的ロスのために採用しなかった。しかしザイルを保持して  
いるということは安全性を考えての上であるので、時間的なも  
のより安全性に重きをおくべきである。ここで日本の山では、  
コンチとして隔時登はんとはかなり混合されているが、問題は、  
ザイルがあればトップは大胆に動きうるというのではなく、充  
分確保出来るかどうかにかかっている。確保が可能になって初  
めてザイルが威力を発揮するのである。語はもどるが結論とし  
て、隔時登はん(歩行)を実施すべきである。少しやばい所  
では、ザイルを、

もちろんザイルにたよることなく、個々が一歩一歩の足の踏  
み出しを慎重にし、個々の力をより強化する方向へもっていか  
なくてはならない。メンバーの落ちついた行動が注目し値する  
。特に新人は敢速に指示に従って行動してくれた。

くく12月28日>

ガスをして吹雪のために景色もみえず、見えたのはパートナーの顔だけである。雷鳥が飛び、黒色のシッポが印象的であった。

第2岩峰の取り付き前の小さな岩を越える時、えつとつと越えたが、4つ目の岩の時、岩を掴まがかえるような姿勢になったト氏は微動だにせず、アラ沢の方へスリップした。

(本人)

非常にホールドの少ない場所であり、非常に雪が少なく岩でできたため、おもいきり踏み込めずいたところ、雪の中よりフィクスザイルを見え、それに手をかけ、踏み込んだところ、ザイルにかけたカの方角がザイルに加えられるべきカの方角と違っていたため、アラ沢側にマラれた。その後フィクスザイルから手が離れ自分のシャフトを差し込んだ制動とメソンの確保により滑り止まる。その後自力で再び再度排戦するが、トップ交代。

くく増点>

北峰、特に等岩峰は新人には少し無理だという話が聞かれ、2名の新人は岩の方もかなりやり、一応基礎的なことが身につけていたので、北峰へ登らした。北峰まで常にローピングをし、2人1組で2パーティを出した。ザイルの確保が1つのポイントだった。ザイルがウーンという声がかれ、安心したあの場合、滑落者の姿は見えず、かなりやばか、たが、確保者と一応きもちの一致がありやばい所を切ぬいた。確保者は滑落者と一応、確保する側として少しの気もゆるされない。登っている本人以上に、真剣でなければならぬ。

特に新人は、アイゼンをはいて岩を登る場合、一つつの足場に対して信用度が薄い。もっと自分の力を信頼してもよいのではないか。余りにも腕力、そしてフィクスザイルに頼るところが欠点である。プレ冬山でアイゼンによる岩登るきを練習したところなのに。確かに、山での事故は技術不足というより、山に対する考えが、大きく左右しているのではないか。

※ 些細な事故2件だけで、それを事前に処理したが今後このような小さな事故も出かねよう各自注意し、勉強させよう。

外傷は0でした。

## 装備の反省

入山前に補修しておくべきもの、たとえば、ビニロニテント用ポール袋、ナイロニテントなどの修理が充分でなかったことなどは、反省しています。多少の不便さや不安を感じることはあったけれども、さいわいにして大事に至ることなく下山できました。しかし僅かの不注意、ミスが遭難に通ずることを思えば、装備点検は一層慎重にしなければなりません。

合宿中における、Essen 奥等の団装の管理という点に関して装備係としての自覚に欠けていた。今回のように、B,C と A,C に分かれて、一方のテントに装備係が2名いたような日もあって、不都合なこともあったが、それにもまして装備係としてズクがなかった。このズクのないさは他の部員にも伝えると思われる。例をあげるなら、ツェルトの粉失、オタマの粉失など、

ガソリンの量、ローソクの数など、フレ冬山の結果などから検査して決めたが不適当であった。

なお 項目別の反省点は、冬山反省のミーティングで述べましたので、ここでは省略させていただきます。

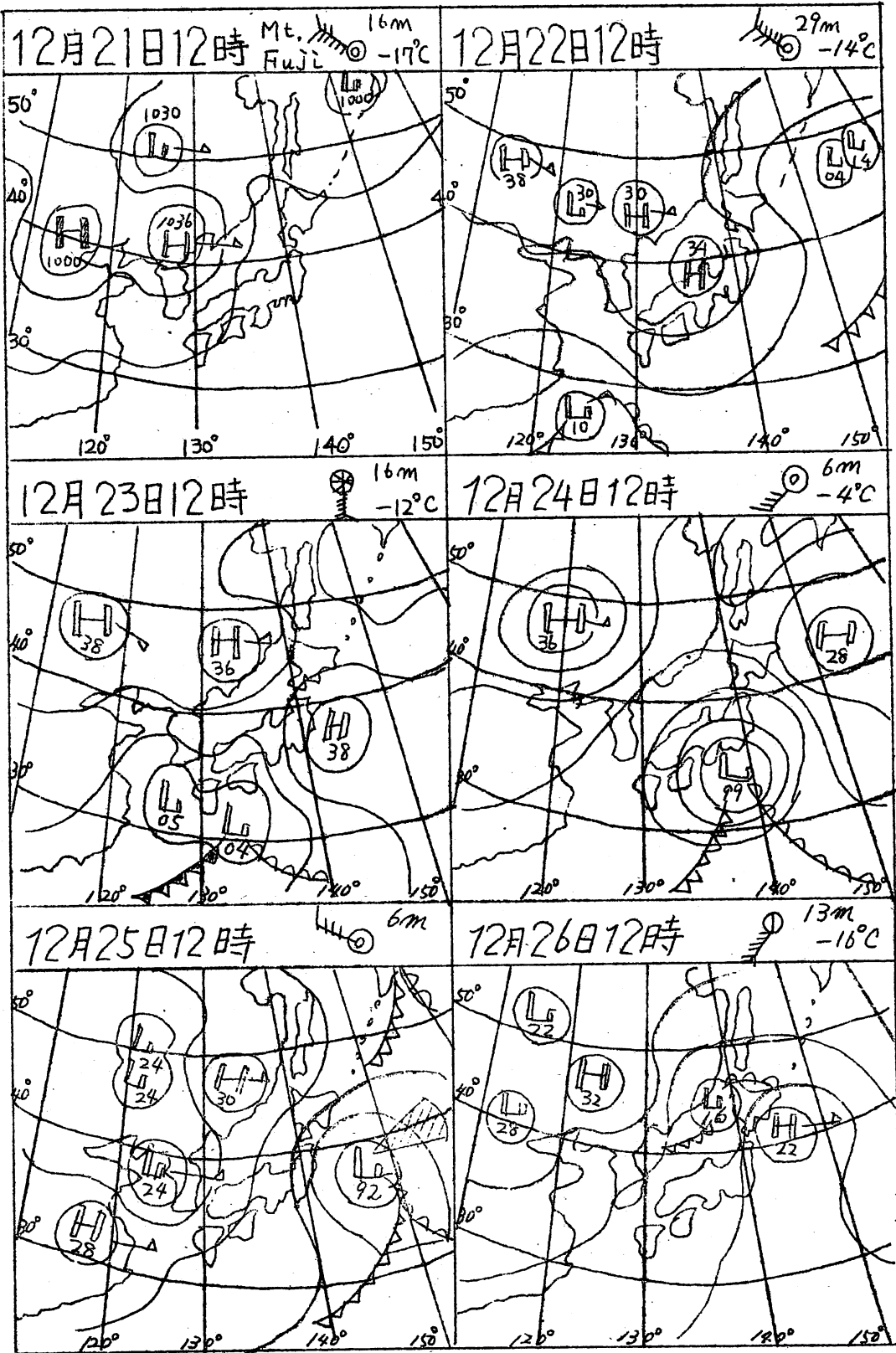
おわり

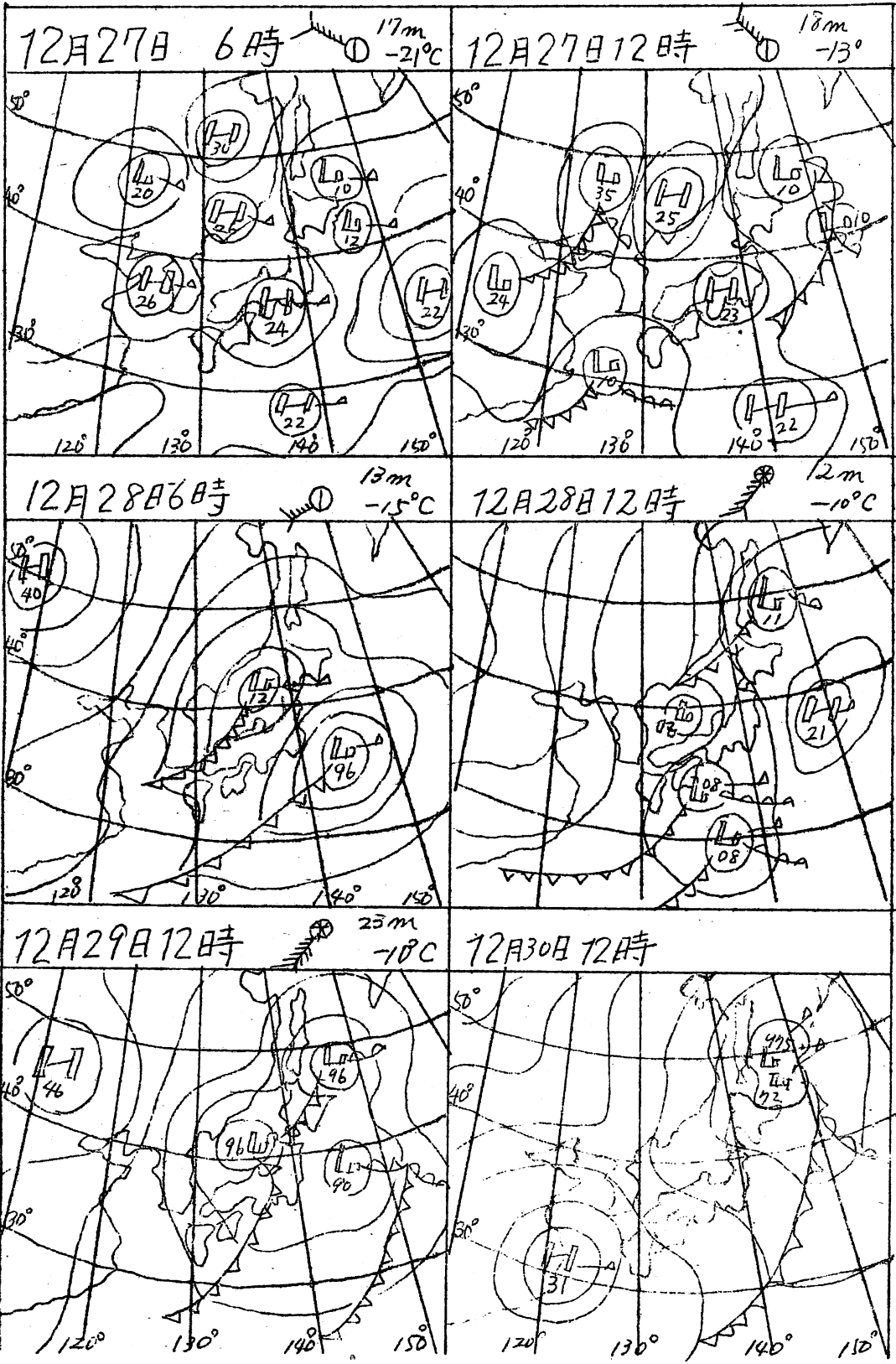
## Essence の反省

まず準備の段階では、今回の山行はポーチ形式なのでBC用とAIC用に分けたわけであるがこの分け方に問題があったと思う。無理に同一日に同一のものを食べなくとも、もっと選択性を入れて疲れた日には、皆の好みそうなものを食べていけばよいのごはないかと思う。

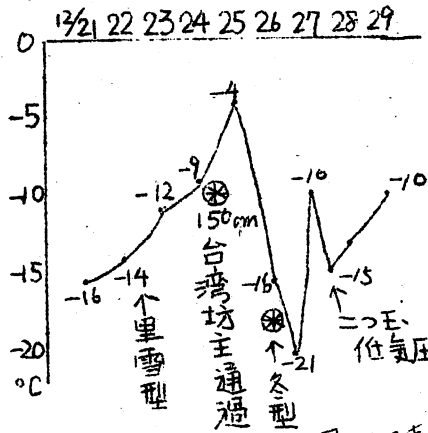
次に Essence の内容であるが今回の山行では、行動食に重点をおいたのであるが未だ検討の余地があると思う。今後の計画に期待したい。また、多少経費がかかってもうまいものを食べれる様努力をしたが種々の条件でいろいろの不満を買いハマになってしまった。ともかくも前進のオ1歩と見えてさしつかえないと思う。







## 気象反省



富士山頂の気温と我々の行動及び、天気図を参照してもらえばわかるように、今回は気象の分野において、富士山頂の気温が、我々の行動に重大な決断の根拠を与えてくれている。併に富士山頂の気温が天候判断の重要な指標とされているが、こうして入山中、毎日記録をとってみると、実に相関関係がよくわかると言えよう。又、ワレ冬山に於ても、今回も、温度計を破壊したため、現地の記録は乏しいものとなった。

## 〈雪庇〉

荒沢の方へ随分、張り出しているのが確認された。風と積雪で、幾月にもなっており、単純に、荒沢寄りだけに出ている。しかし積雪量も多く、又、軽い雪債のため、うすいものは認めにくく、地形的にも、荒沢側に鋭く切れているため大きなものは少なかった。

〈乗結〉この沢の頭を鹿島橋俣へ下る斜路は、ウラストしており、強い日射と気温でガサガサとなり、リカンカツが効きにくかった。しかし、エカブツは見られても、エビのシツホは見られなかった。

〈雲〉AC(2400m位)においては、ほとんどがスラフが27日な。BC(2100m)がガサって見えなくても、こちらは太陽の中であった。分は2000mがやっという中、気温が下がった。(以上 伝山記)

## 医療反省

- 2パーティー用に薬品を2セット用意したのは正しかった。(AC and BC)
- ビタミン剤は、高価でも長期入山時には是非必要
- 風邪薬もバツカリンを用意したが、ハナカゼ用も必要
- 外傷者ゼロでよかったが、山特に冬山では直接的な痛みより、寒気等による凍傷対策を充実させた。Vitamin E 用意 ETC...
- 現般日用にサロンパスもいいじゃないだろうか。
- 三角布の持参を今後実行したい。応用範囲は更に大きく広い。
- 蛇忠だが、日赤の行なう救急看護員の講習を受け、資格を1人で持つべきと思う。
- 入山前、いろいろ勉強したが、応急手当ハ、ドブウ位は団装にする用意が必要と思う。(以上 伝山記)

# デジタリ 個人反省集 イイタイ放題。

<杉本恭二>

何か、私の心を涙ぐむ程とらえる。なぜか気がつかずにいたけれど、私の望みあなたの上にある。何か、動き、導き、輝き初める。光の中に歩いて行きたい。……  
ワカンで深い雪の中を重いザックを背負い歩いた日々、2時間間隔で天幕の囲いをラッセルした日々、ピッケルで氷をくだった日々。一歩一歩足の運びを止めなかった。いつしか有限の地、頂上に立っていた。そこは剣岳も見えず、雪がちらつき寒そうにタバコを口にくわえている顔だけが。頂上に10分もいたのだろうか。あの寒さささるような痛さに耐え期待に胸をふくらませた日々から、たどり着いたところはここなのだ。有限の地を歩み続けもうこれ以上上はないところ有限と無限の接点に足を踏み入れた。そこで得たものは、剣岳の姿でもなく、アタックが成功という言葉でもなかった。又、努力が報われたということでもなかった。何か新しい光を見た。ただその光だけ。この冬山はただ。目的の雪がうんぬんさ。これは当然である。しかし、17人という行人で、冬山にとりくんで来た。自己が組織のつまり、山岳部という共同幻想によってまじり合った。は、何も得られないうら。今、この冬山がどうい形式なものだった。は言えな。かなり何人が大き。鹿島槍も大きかったが何人何人の精神と肉体がかもし出したハーモニーが素晴らしい。あれ程メンバーがまとまると思っていなかった。冬山、剣岳北方稜線もそう遠くにはない。しかし現在の風潮、そして山岳部という共同幻想にまじり合った。安易な妥協よりも、より厳しくより困難へと腰を構え山の厳しさを知ら。有限から無限へと歩みたい。自己満足は最後でよい。新しい山行のページを開こう。

「この世の中で最も清らかなものによって、最も苦しい試練を受けようとする心が山へ誘うのだろうか？」

<横井憲> 山での満喫

氷と雪に表現される冬山。冬山は静として眠るがごとくである。冬山の魅力は、氷雪に飾られる自然の純粋さであり、その景観に感動する己が生かると楽しみを見出すことである。冬山に限らず山の四季は変化に富み、その景観に己の歡喜もひとしおである。

さながら、冬山の構成要素は卓越し、迫力、量感、高度感、悠々感および季節感が素晴らしい自然芸術を形成する。  
我々山岳部では冬山合宿は年間の目標であり、総決算でもある。山行の評価は、登頂が失敗という一元的な観測からとらえるのは、あまりにも軽薄である。計画及び実践の過程をふまえて、さらに三元的に観測から評価すべきである。我々は、単なるクライミング・アマリスから明確に区別されなければならない。我々が探求するものは、山というあこがれを登山という行為を通じて、その自然に感応し、生ある己を認識しようとするそれを理念とする。ピークハントとは大自然のなかでは結果的には偶然に等しい。その偶然を求め、連続する瞬間が登山の本質である。この本質論から、各自今山行を回想する。己の本性は山行のすべてを美化してとらえる。「快」はもちろん美、「苦」も美であるが如く回想する。この幻想が登山行為を無限に起こさせる。己がこの幻想からさめる時、永久に山から遠ざかろう。山は自然そのものだ。氷の上、吹雪の下、寒さの中、今、想えば、回想する価値も見出せず、ただ歓喜に装飾された瞬間にすぎない。晴天におおわれる日、眼前に展開する景観は、筆舌につくしがたく、己はこのひとときを求めて登山する。あこがれに抱かれ陶酔するために。登山は、その為の手段である。必要かつ十分な行為である。技術の上達を目指す者、自然に陶酔する者、おろん両方を願う者もいよう。しかし、いかにしてもアルプスは、無味乾燥の感は否定できない。己から次第に遠ざかろう。何かか足りないからだ。精神哲学者コーランは、「未知を求めて旅する者に、神はそのパラダイスを与ふ」と言う。この言葉に強い印象を覚え、「己と登山との方向が定まったように思う。未知の世界はすべてが感動である。感動から始まる山との対話、対話からはじまる自然への讃美、それは己と山の讃歌である。永遠の讃歌を詩うためにどんな山でもよい、一生登り続けたいのです。

### 〈糸川 豊〉 4年うめ組

一日め、生まれて初めて、あんな重いザックをかががせて頂きました。感謝の気持ちでいっぱいです。尾根のラッセルも、ほかの人はみな快調でした。ホントにがんばりました。寒さにふるえたり、荷物の重さに苦しんだり、堅いフランスパンをがじり、涙が出る程おいしい朝のスパンゲイ、山でしか味わうことのできない厚切りようかん、みんな

腹一杯たべて、脚を動かして、夜はみんななかよくぬきました。G2が  
C1にいて人たちを迎えにいらした日、5m程落ちてしまいました。落ちたと  
鬼ってから、スピードがゆるんできたので安心しましたが、止ってから恐い気  
がしました。S代とK代には心配かけました。ホントにすみませんでした。  
純上をかりてお礼申し上げます。アタックの日、トランシーバーの  
交信では、S代も、またK代まで、絶対にPまでゆくようにおっしゃった  
のですけれど、ピッケルでなぐらいた後、一晩、テントの外に立たされる  
程、怒られるのではないかと心配しながら、Pふんだだけでり帰り  
ましたが、心配したことはさへず、H代に暖かく迎えられました。途  
中K大パーティーのため、数時間、順番待ちしました。K大の人って冷た  
い。31日、H代とY代のジャンケンポンで下山日は元旦と決まり、  
大みそかは、下界の人と同じ紅白をききながら、ありあまるEssen  
と冷えたバズスキーで大コンパをしました。T代持参の4合びん  
の清酒は、小生が一度も見ないうちに、どういふわけかもうないとのこと  
でした。

<立岩剛> 感無量!!

この冬山をもって和出の学生生活ごの山登り  
は、終わったという訳ですが後からふり帰って見  
ますと、けこう楽しかった事、苦しかった事、りりり思  
い出されますがまあ成功した合宿ごであったりご  
は、ないかと思ひます。鹿島槍東尾根という立派  
な尾根(?)を力を合わせて登ったのだから上田  
山岳部が一步発展したと見てよいと思ひます。

最後に山岳部を去るに当って今後の山岳部の御  
発展を祈ります。

## <広山和臣>

10日間の冬山合宿 前半はボッカ隊ですごし、後半はACのキーパーとして東尾根で新年を迎えた。上田山岳部のこれまでのもっとも充実した時期の一つに数えることのできる冬山ではないだろうか。もっともアタックもせず、はやる心を、そして、いちまつの淋しさを日々キーパーとしての任務遂行に自分の全てを打ち込んだ私にとっては、今回の冬山を更なる我々の前進への不滅の足跡として、しっかりと位置づけることによって、私は冬山の総括として、しかし、31日、BCへ集結した時は胸が苦しくなるほどのくやしさと虚脱感におそわれた。私は、自分自身に対して、精一杯のほけまじと共に、自らすすんで、最後のEssen当番をかって出た。今になって想えば、すべてがなつかしく、そして、他の誰よりも、俺はアタック隊のためにやっただという強い満足感と自負心が湧いて来る。自分の任務に徹し切れることの大切さ、すばらしさのかけらをこの冬山で知れた気がする。よく言われる言葉だが、「1人はみんなのために、みんなは1人のために」という理念が、私利、私欲、思惑と激しくぶつかり合うまじとなつた自己鍛錬の場ではなかつただろうか。私個人としては、山岳スキーを自分の山行の一つのスタイルとして充実できるように今後とも様々な機会をとらえて体験を積んでゆきたい。今回の冬山に於いても、代動力という漢に注目してみると、小は不必要と思われものをサグザックや、アタックザックに入れて、ラント内に持ち込む者がほとんどで、居住性の悪い冬山においては、もっと厳しく自己管理の必要性を感じた。又、又は、一極詰の団装にしても、Essenの軽量化、例えば、大胆に朝食は紅茶とクラッカー位にまじして、行動食に重きをおき、自由に少量ずつでも食べるようにするなどして、改善するだけの試行をする価値は大きいと思う。総じて今回のEssenはすごい成績と思う。おめでとう良かった。サア!! 春山がすぐそこにある。試練が終わったら又雪山へ!! Let's go!!

## <石川良昭>

今回の山行は、非常に余裕のある山行だったと思う。計画の面でも、3回にわたる偵察その他、奥佐の方でも充分すぎるほどの日程、本当に余裕のある山行だったと思う。そしてこの余裕こそは、各隊員がそれぞれ計画の段階から各自の役割を確実に実行していった結果のあらわれであろう。本当にみんなよくやったと思う。その奥、俺は、どうであっただろうか。なんとなげないことか。そう、なにやらなかった。そう、ただ合宿に参加しただけであった。準備の段階で何もやらなかった俺であるから、せめて合宿中だけでも、一生けんめいやろうと思った。しかし俺はなんというズク無しであろう。

結局は宿中においても、人なみ以上に、いや人なみにも伝力かなかった。  
ズク<sup>無</sup>しめ。そんなわけで俺には与宿をどうこう言う  
資格はな<sup>り</sup>。ただ面白かった。特に岩峰の登はんは。  
巻<sup>備</sup>の莫<sup>で</sup>気がついたこと。…セリルバンド…うでにけるやつ  
は、ギルを扱う場合には、<sup>り</sup>本に直接つけるやつのがセリル  
を巻く心西<sup>か</sup>なり。なにせこの俺が岩峰下降中にお<sup>り</sup>こと  
ししまったのだから。た<sup>だ</sup>しすぐ下<sup>で</sup>止<sup>り</sup>て回収でき<sup>る</sup>から  
心西<sup>え</sup>なく。